

應日系最終目標相關問題之研究

林長河

銘傳大學應用日語學系專任副教授

【摘要】

應日系 8 年間暴增到 25 個，是已有 40 年歷史的日本語文系的 1.8 倍之多。快速成長之下、教育品質堪慮。本文主要針對應日系的最終目標加以考察，並提出能兼顧理想與現實能調和的可行性目標。

應日系的目標頗為多元化。但有近 8 成的應日系，其目標定在培養通曉日語的商務人員。但所謂「通曉日語」的內涵，有必要更具體化的內容作為遵循的原則，提供給系上教師作為教學的參考準則。因此，本文將提出日語商務人員理想與現實兼顧的三階段目標。首先是完整工作能力的理想狀態，再者是進入理想的過度階段，最後是具備最起碼應日系畢業生能勝任工作的合格階段。筆者並提出 7 點總結論。

- ①說・聽技能的訓練應調整成應日系核心課程。
- ②採取積極具體的行動培養能用日語工作的應日系畢業生。
- ③研究製作日語商務人員養成教學內容。
- ④評量系統併用學力與能力測驗的概念縮小階段目標的落差。
- ⑤最終目標的明確化可提升教師學生間的動機並提高鬪志。
- ⑥導入日系企業的實習制度。

⑦最終目標能否達成全繫於師資的良瘡。

應日系理應挑戰全新的價值觀、為自己的生存發展找到新定位。

【關鍵詞】應日系，最終目標，日語商務工作，說與聽，理想與現實

応用日本語学科の最終目標についての一考察

—理想と現実をめぐって—

林長河

銘伝大学応用日本語学科専任副教授

【要旨】

台湾ではこの8年間に応日系が25も設けられ、40年の歴史を持つ日文系の1.8倍まで急増した。その数が急激に増えたため、教育の質が懸念されている。本稿では、応日系の掲げた最終目標について考察を加えた上、理想と実践の間に調和の取れた目標を提案する。

応日系の目標は多様化しているにもかかわらず、8割は「通日語的商務人員（日本語をマスターしたビジネスマン）」の養成と設定されている。しかし、「通日語（日本語をマスターした）」とは何か、より具体化したシラバスが必要である。それを基準にして教育と評価の物差しとして現場の教師に提供すべきであろう。

従って、本稿では現場での実践において参考になる三段階を提案する。つまり、即戦力を有する理想的な段階、橋渡しの段階と最低の容認できる合格段階である。最後に最終目標をめぐる7点の意見を取上げ、結びとした。

- ① 話す・聞く技能の養成を応日系の核心課程に据えるべきである。
- ② 最終目標を日本語を仕事に役立たせるビジネスマンの養成とし、それを実行する。
- ③ ビジネスマン養成のシラバス・デザインを作り上げる。
- ④ 評価システムは学力テストと能力テストの概念を併用し、落差を埋めていく。
- ⑤ 最終目標の明確化によって教師学生間の動機付けを高め、闘争心を持たさせる。
- ⑥ 台湾における日系企業での研修制度を導入する。
- ⑦ 最終目標が達成できるか否か教師が鍵になる。

【キーワード】 応日系、最終目標、日本語でのビジネス、口頭能力、理想と現実